No.102　2010.1.4

健康への道

名古屋大学総合保健体育科学センター

パッシブ・アグレッションと現代社会

小　川　豊　昭

先日もあるトップ企業の部長が，「息子のことで相談があるのですが」と相談に来た。息子は，一流大学に入ったのに，家でぐうたらしていて講義にあまり行かないだけではなく，クラブ活動も遊ぶこともしないで，そのまま留年が決定したというのである。そして，父親がふがいなく思って，将来どうするつもりかと問いただしても，要領の得ない返事が返ってくるだけで，父親は途方に暮れてしまったのである。父親の方は，企業戦士の勝利者らしく自信に満ちて声も大きく，やや人を見下すようなところがあるが，今回のことは応えているらしく，目が少しおどおどとしていた。私は話しを聞いて，息子さんは引きこもりの始まりで，よほど真剣に対処しないといずれ退学になってしまうだろうと伝えた。

このタフで自信に満ち，様々な修羅場をくぐってきた父親でも，せっかく入った大学に息子が通わないということだけで，もうすっかり参ってしまっていたのである。父親は，心密かに息子にも同じ業界に入って活躍して欲しいと願っていたのであるが，その期待が徐々に裏切られていくのを感じていた。父親は，失望のあまり今までの自分の成功は何だったかと疑問を感じ始めた。

彼の息子は，このように父親の期待を裏切ることで父親に反抗しているのである。しかし，なぜ息子は文句があるなら父親に直接言わないで，何か陰湿な仕方で反抗しているのであろうか。それは，父親に対してとても勝ち目が無いからである。人は，相手に怒りを向けるときにとても勝ち目がないと思うと，直接攻撃しないで，相手の期待を裏切るという受け身的な形での攻撃性を発揮するのである。これがパッシブ・アグレッションである。投げやりな態度とか，すねた態度とか，サボタージュやさらにはハンガーストライキなどもこのタイプのアグレッションである。この特徴は，攻撃(アグレッション)している本人も自分が怒りを持っていることに気がつかず，攻撃していることも気がつかないし，相手もいらだちや怒りを感じるだけで，なぜなのかよくわからないので，直接ぶつかることがない。そのため，このようなアグレッションの関係がいつまでも続いてしまう。直接殴り合えばすぐに決着がついて，次の段階に進むが，パッシブ・アグレッションは，どちらかが死ぬまでいつまでも続くのである。というか，息子は父親が死ぬのを待っているのである。

世界的に見ても日本だけに異常に多い青年の引きこもりは，このパッシブ・アグレッションの最大級のものであると思われる。彼らは，非常な怒りを抱えているがそれを引きこもりといういわば寝技に持ち込んで親や社会と戦っているのである。このことから逆に，日本の社会の硬直性は，青年にとっては，とても勝ち目がないほどであり，若者が社会を変えていこうという戦いを挑む勇気を失わせるほどだと言うことである。我々は，この「引きこもり」という個人の病理が，日本社会に対して発している警告を，真剣に聞く耳を持たなくてはならないと思う。

（保健科学部）